言葉と動作の相互作用を探る実践

ハラサオリさんと

往復書簡、2020年5月－9月

ハラサオリさんへ

こんにちは、お元気ですか?

この間はオンライン・ワークショップありがとうございました。

サイト・スペシフィック性の話、そしてコップを使ったエクササイズ、楽しかったです!

ワークショップ後に思い出した映像があるのですが、今回の手紙はその話から始めたいと思います。ダンサー・振付家Alain Buffardが撮った、『My lunch with Anna』*という映像です。AnnaはAnna Halprinのことです。ワークショップで言及されていたTrisha Brownや、Yvonne Rainerも彼女に学んでいますね。

映像内では、Alain BuffardがAnna Halprinへ、ランチを一緒に食べながら色々な質問をします。制作のプロセスや日常の動作に関する実験、そして「スコア」という概念についてなど。また冒頭では、Anna Halprinが制作手法であるRSVP Cyclesの図を用い「ResourceからPerformanceへ即興を通じて移行しながら、そこで生まれたものがScoreになる」と説明しています。こうして書かれたスコアとしての言葉は動作のバックグラウンドとして機能していきます。『My lunch with Anna』という枠組み自体、Anna Halprinのパフォーマンス『Apartment 6』のスコアを引き受けているのかもしれません。つまりスコアがリソースへと再び向かっていくという見方もできますね。ここでは単なる言葉による対話だけではなく、スコアとしての言葉が動作をつくり、そしてまた動作が言葉を生むような、パフォーマティブなやり取りが行われていきます。

サオリさんの作品『no room』を去年拝見したときも、こうした言葉と動作の関

係が気になりました。タイトルの言葉遊びから始まり、ダンスをしながら、ナラティヴな言葉も常に発されていましたね。ワークショップの時に、動きをノートに記録するとおっしゃっていましたが、作品はどの程度まで事前に書かれているのでしょうか。

また、言葉と動作が相互に解説し合うだけでなく、両者が一見バラバラで何の関係も持たないような時もあったように思います。私が単に関係を見つけられなかったのかもしれませんが。サオリさんの中で言葉と動作はどのように位置づけられているのでしょう。

もう一つ、『no room』に関して聞いてみたいことがあります。翻訳の問題です。言葉を使う作品の場合、翻訳をどうするか考える必要が出てくることもあります。作品で使用される言語は日本語でしたが、いつかこの作品を多言語に翻訳することはお考えですか?

あるいは、作品のサイト・スペシフィック性は、言語にまで及ぶのでしょうか。つまり、この作品がノグチルームという場所でしかなし得ないように、言語に関しても、日本語でしかなし得ず多言語への翻訳が不可能な作品なのでしょうか。

ノグチルームへは、日本語を話さない友達と訪れました。ベルリンとパリから来たBLESSもその場にいたのを覚えています。私はこの作品において言葉の部分がかなり重要だと思い、友達が意味を理解できないことがくやしかったのですが、彼自身は落胆した様子を全く見せていませんでした。実際、彼は言葉以外のところで何かを理解していたようです。一体それが何であるのか、私にはわかりません。

このことに関して、運動分析の専門家であるHubert Godardの、Pré-mouvement（前・動作）という概念が少し参考になるかもしれません。以下に

短く引用します。

「私たちは、重さや重力に対するこの態度をプレ・ムーヴメントと呼ぶことにします。それは私たちが動く前、ただ立っているという状態の中にもすでに存在し、実行しようとしている動作の表現を担うものです。」**

例えば、机の上に置いてあるコップを取る動きをするとしましょう。Hubert Godardによると、コップへ実際に腕をのばす前の時点で、体の中ではすでに腕をのばすための何らかの姿勢が整っている。そしてそれは無意識のうちに行われているとのことです。これがプレ・ムーヴメントですが、こうした動作の土台であるプレ・ムーヴメントは、ダンサーにとって単に振り付けを実行するよりも重要である、と彼は言います。また、アレキサンダー・テクニックの理論を用いながら、こうした土台は他者と分かち合うことが可能、つまり共感による動作の感染が起こり得るとも述べています。

この考えをレクチャーパフォーマンスに当てはめると、以下のように考えられるかもしれません。

パフォーマー：

言葉を発する前、何かを願った時点で、体はすでに何らかの動作を開始している。

観客：

言葉を意味として理解する前に、動作の感染により、体はすでに何かを捉えている。

もちろん、実際はこんなに簡単ではありませんが…。言葉は単に頭で理解するだけのものではないという、曖昧な確信を後押ししてくれる概念だなと思っています。

最後になりますが、今書いたことに繋がるようなエクササイズをひとつ、別紙で入れておきます。Meg Stuartがステイホーム期間に発表したHOMEWORKから1つ、そこから私が発展させたものです。レクチャーパフォーマンスが主題なのに、言葉になる前の動作に関するエクササイズを提案してしまいましたが、良かったら試してみてください。

以上、あまり整理しきれないまま色々書いてしまいましたが、言葉と動作の関係やその翻訳、言葉もしくは動作になる手前の何かに関して、サオリさんがどう捉えていらっしゃるのかお聞きしたいです。また、関連するエクササイズを1つ交換していただけると幸いです。その他、思いついたものがあればなんでも。逸脱も大歓迎です!

*『My lunch with Anna』は、以下のリンクより視聴可能。ちなみに、フォークやサラダを使いながら、サオリさんとやったコップのエクササイズに似たものをやっているシーンもあります。

https://www.numeridanse.tv/videotheque-danse/my-lunch-anna-0

**原文はここから：Hubert Godard, Le geste et sa perception, La Danse au XXème siècle, Marcelle Michel, Isabelle Ginot, Bordas, Paris, 1995. p.224.

Meg Stuartのエクササイズ

BoCA onlineより：

http://www.bocabienal.org/evento/homework-meg-stuart/

Solo Scores for Now (2020), Score 4の後に、

−同じことを、体の1つの箇所に集中して行う。

Ex. My knees are too exhausted to tell you

My eyes are too hungry to tell you …

−同じことを、体の違う箇所と違う感情で同時に行う。

Ex. My finger is too horny to tell you, and my hips are too honest to tell you…

ユニより

ユニ様

こんにちは。サオリです。
まずお返事が大変遅くなってしまい申し訳ありません。内容について考えている内に、リハーサルや次々変わる状況への対応に追われてしまっていました。というのはいくつかある理由のなかで最もそれらしいもので、別の理由として、「手紙」に構えすぎて、手がかたまっておりました。ユニさんからの1通目を待つ間は、送る封筒を選んだり字の練習をしたり、楽しく過ごしていたのですが、いざ書くことなると、その難易度に慄いてしまいなかなか進まず…ノスタルジーを通り越した普通の不便なやりとりとなってしまい恐縮です。
さて前置きと言い訳が長くなりましたが、表現のお話へ移りたいと思います。

ユニさんのお手紙を読んで、改めて思ったのは、パフォーマンス表現が精密な日本語と共に批評やアーカイブとして語られてきた歴史は欧米

のそれにくらべると浅く、重要なキーワードはほぼカタカナの外来語で代用されるか、専門用語としてそのまま定着しているということでした。ハイコンテクストにならざるを得ず、これを共通言語として国内シーンで議論をすすめたり、作品を発表したいと思うと活動範囲が限られてしまうように感じます。ダンスでも演劇でもない「その他」の身体表現に関する教育や批評が積極的に開発されないこと、外国語の資料も読まれづらいことによって、世界のスタンダードから、日本、ないし日本語がじっくりと遅れをとってきている、というのが私の視点です。

スタートから脱線していますが、これは私がドイツと日本を往復しながら活動する中でよく引っかかる点なので共有させて頂きました。ユニさんは、パリと京都を往復されているのでしょうか？複数の都市で思考やリサーチを重ねる上で、どんな揺らぎがあるのか、またはないのか、ぜひお聞かせ頂きたいです。

本題に入ります。主に『no room』の解説と
プレムービメントの解釈、最近のクリエーションについて
書いていきます。

『My lunch with Anna』拝見しました。ほほえ
ましいですね。机とイスをかこむパフォーマティブな
やりとりを見てSimon Fujiwaraというアーティストによる
『再会のためのリハーサル』という作品を思い出しました。
Scoreにも関係しそうなのですがまた脱線するので、
まず『no room』のことから…。
○どこまで事前に決められているのか。
当時使用した台本を同封しました。これはクリエー
ションプロセスというより、もっと実務的なもので
コラボレーター達や、テクニカルチームのためにつくった
番盤のようなものです。ザクザクと区切った空間、
時間ごとに、異なる狙いと各自の動線がこのように
決まっていて、このレイヤーはどの上演回でも変わり
ません。各演者の動きとして振付的に決まって
いたニ繰り返し練習をしたのは、2人のデュオダンス、
3人のテーブルダンス、4人のユニゾンと行進、私のソロ
(☆写真同封、後述)

ルームにまつわる解説、作品冒頭の諸注意です。
最後のシーンは、規則を守りつつ、OKとNGの境を探るというものですが、これも大きな流れ、各自の動線、探る対象のボーダー(走っていいのか?水を庭にまいてもいいのか?大きな音を出してもいいのか?etc)は決まっていました。ダンサーの動き、ドラマーの演奏私のセリフは即興です。
「台本」へ話を戻すと、「この表に名前がないときは勝手に過ごす、どこにいてもいい、何をしていてもいい。次の準備や移動だけ忘れない」という指示を出していました。各自のプロフェッションがバラバラで、構造も上記のように決まっているような、いないような感じなので、当然作品全体のフォーカスがぼやけるのですが、作品中盤から演出家の私の語りやダジャレなど言葉によって鑑賞者と意識を共有しながら、最後のカタルシス的なシーンへ向かっていくような構成になっています。しかし結局のところは1グチ・ルームのもっている圧倒的な空間の馬力が、約70分のカオティックな状況をひとつの体験としてまとめてくれる、鑑賞者も

"そういうもの"として受け入れざるを得ない、という割と強引な作品だったと思います。

全体のスコアと流れはこんなところで、その中で特にスコアと動きの関係にフォーカスしていたのは先述のテーブルダンス=3人がドローイングを描くシーンでした。ここでのスコアは言葉ではなく、線です。これは、描くべき線を事前に共有していることで3人のユニゾンと、うつの面が出現するというものでした。scoreに沿ったmovementが生まれ、紙の上にresultが残る、それがarchiveでscoreで…という、1つの循環でもあるのですが、それぞれをダイレクトにもつなげられそうだと思いました。

○言葉と動作はどのように位置づけられているか
これは私の中でまだはっきりとしたメソッドが構築されていませんが、『no room』でも使った言葉遊びはその場のイメージを増幅、変更させる手段として重宝しています。特に母国語の日本語なら細かい

ニュアンスを操作しながら意味とその場のムードを横へスライドさせていくようにズラせるので、鑑賞者とのコミュニケーションにおいて、ときに寄りそい、ときに置き去りにするというダイナミズムを生むことができます。私が面白いと感じるのは、そこで設定された制作者と鑑賞者の距離によって目の前で行われている動きの解釈が大きく変わるということです。ですから、私の中で言葉と動きについて考えるとき、その2つの要素の間には常に鑑賞者が存在しているのだと思います。

言葉と身体がダイレクトな翻訳関係にある明確な例として手話があるかと思います。かつては、このような振付を試みていたこともありますが、今はその逆へ向かっています。正確な関係をつきつめた先への興味が失なわれてしまったというか、そこにアートの役目はないと感じたためです。『no room』で私が即興的に発話しながら動いていたシーンでは、言葉と動きをあえて乖離させました。これはダダイズム的な興味、日本演劇のチェルフィッチュ

その周辺のアーティスト（山縣太一、大谷能生ら）の取り組みに影響を受けたものです。口から発するテキストは意味の通ったものから始め、言葉遊びによってイメージをふくらませつつ、身体は建築に触れる、線や構造をなぞる、など物理的空間に定着させる、といった乖離です。完全オリジナルのメソッドではないにしろ、これはノグチ・ルームでのサイトスペシフィック表現にハマるものだと考えていました。

○この作品を多言語へ翻訳することを考えているか。
Yes イサム・ノグチとその父が、アメリカと日本という二ヶ国のアイデンティティの狭間で苦しみながらも、そこに基づく成功を収めたことを考えれば、最低でも英語へ翻訳、上演されるべきだと思います。しかし、先述の、言葉遊びによる時空のチューニング部分は直訳もできないし、私の語学力では即興でも脚本でも難しそうです。ネイティブかつクリエイティブな翻訳家にドラマツルギーとして関わってもらうべきですが、表面的には別の作品になりそうですね。another room…

☆BLESSとのコミュニケーション

BLESSには、コンセプトと、リグナルームの歴史、意味の通った台詞部分だけ翻訳して渡してありました。しかし制作プロセスにおいて、彼女たちは具体的な意味の整合性以上に、鑑賞者とのコミュニケーションについて着目した指摘や提案をしてくれていました。そもそも2人は、上演芸術全般に対して非常に懐疑的です。いわゆるこの"上演"というフォーマットは演出家がある権利を発揮して、観客を黙って座らせておくことが出来るという特殊な力学の上に成立してきたものですがすでに多くのアーティストがこれを壊すための作品を発表しています。私もその1人でありたいと思ってやってきましたが、BLESSの2人はそれ以上にそうした"権威的瞬間"に敏感で、プレストでもリハーサルでもその議論にかなりの時間を割きました。そうしたやりとりを通して、結局私はまだまだ舞台人として権威性をある程度肯定している！ということを実感しました。また、この権威性に対するセンサーは、非言語的なものであると感じ、その点については

BLESSの視点を借りながら構造を打破していくことに努めました。その過程で、『novoom』を通した我々の試みは、あるファンタジーを創出するtheatre的なことではなく、現実の状況をデザインすることであるという点で合致しました。"現実"とは主に鑑賞者の存在です。

クレジットをChoreographerではなく、Situation Designerにしたのはこのためです。

ユニさんのご友人を始めとする日本語を理解しない方々が何を受け取ってくださったのかは、機会があればぜひお伺いしたいところですが、我々がBLESSと日本語を介さずに取り組んだのは非権威性のデザインだったと思っています。

☆プレムーブメントの解釈

プレムーブメントについては存じ上げなかったので、まだ完璧に理解できていないかも知れないのですがあるところでアフォーダンス理論と交差させられる予感がしました。コップに対して生まれるプレムーブメントとは

すでにコップと人体の動作関係を学習した人同士が共有できるものかと思います。アフォーダンス、デザインもまた、人が社会的に学習した色、形、空間に対するセンサーを利用して、特定の動きや動作を誘発するものです。(他にも多様な解釈があります。)ちょっとこれは雑なつなげ方なので、何かのエクササイズへ応用できたらいいですね。

そして「動作の感染」という表現が、このパンデミック下においてはとても興味深く感じられました。ご存知かと思いますが、ダンスのテクニックのひとつに「コンタクト・インプロビゼーション」というものがあります。2人以上での身体的接触を前提に、双方の重力関係に従って生まれる動きなので、現在のこのコンタクト・レス社会ではまさにタブーなダンスです。今私がパフォーマーとして参加している プロジェクトでは、この感染危機に対する(やむを得ない)レスポンスとして、「ポスト・コンタクト・インプロビゼーション」の開発をリサーチのひとつとして行っています。2人のパフォーマーが、2つのオブジェクトを介して接触なく重力を

共有するというものです。9/19、9/20にベルリンのBethanienという会場で上演される予定ですが、まだベルリン-パリ間の移動は厳しいですよね。パリにも行きたいのですが。プロセスの写真だけ同封します。言葉はナシ、光りものです。

「感染」によるコミュニケーションをこれまで自分がどう扱ってきたか、考えてみています。内観に関してだけ言えば、プロフェッショナルなトレーニングを積んだパフォーマーと、そうでない観賞者のそれには圧倒的な差があるかと思います。その解像度の差を埋める手伝いをするのが、言葉なのか？そんな気がしてきましたが、完全に見当外れという可能性もあります。

この辺りで一度締めたいと思いますが、矛盾した点や、意味不明な箇所があれば、ぜひご指摘ください。別紙にエクササイズも添えました。

私は一応まだ10~11月に日本へ帰国する予定です。
そして、これはあまり現実的ではないのですが、10月の
半ばに韓国で開催されるパフォーミングアーツフェ
スティバルを観に行きたいと思っています。それ
以外の期間は横浜、東京を中心にリサーチなど
しています。
ユニさんはどうされますか？直接お話できる
チャンスがあればうれしいですが、次のお手紙の
交換も楽しみにしています。
引き続き、どうぞよろしくお願いします。

2020.8.25
ハラサオリ

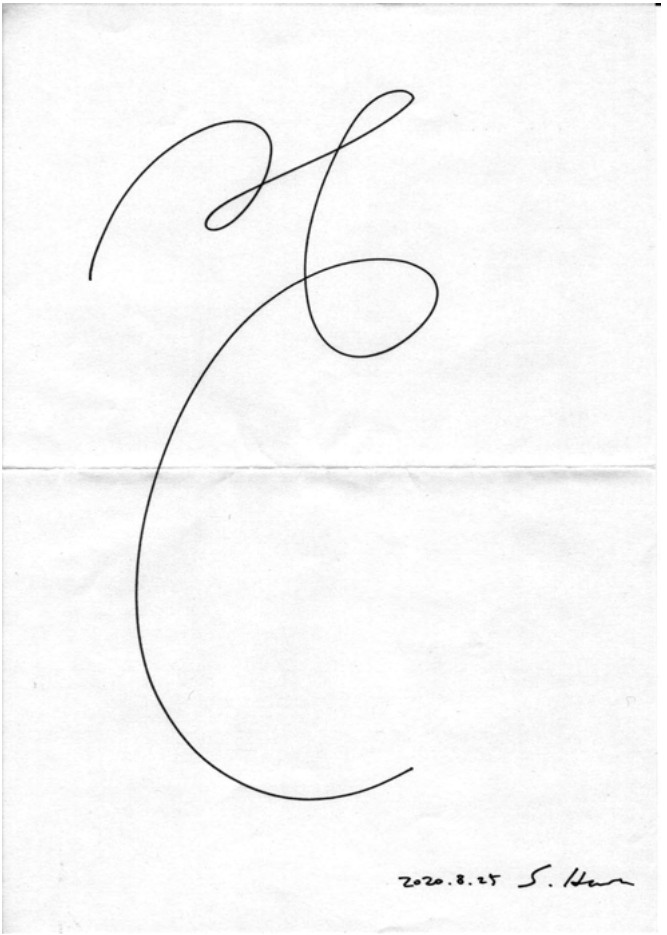
サイズ　no room のクリエーションより

① 同封したドローイングをペン先でなぞる

② 指、セジ、鼻、その他どこでも、
身体の一部で同じくなぞる

③ 別の紙に同じ線をペンで描く

最近、空間を介さないユニゾンの方法を考えていて
このドローイングを言葉に置きかえることを試して
います。言葉というより、「声」なのですが、自分で
始めたラジオ番組で、振付を電波で飛ばし、
届いた先で起こっている（であろう）動きたちを
想像する、という遊びです。「右手を上にあげる」
という声の指示1つに対して複数の方が動き
が起こっているはずですが、同じスコアならユニゾン
と呼んでもいいのでは、と思っています。これは
ラジオ絡みのメディアアート的アプローチで新作に
したいと思っています。


2020.8.25 S. Hara

ユニ

1「ことばと動作の相互関係」を念頭に作ったエクササイズを、紙に書く。

2 写真に撮って送る。

↓

サオリ

3 受け取ったエクササイズに応答して作った新たなエクササイズを紙に書く。

4 写真に撮って送る。

↓

ユニ

5 受け取ったエクササイズに応答して作った新たなエクササイズを紙に書く。

6 写真に撮って送る。

↓

これを繰り返し、5往復・10エクササイズ行う。期間は、1日おきくらいで集中的にしても良いし、1週間に1往復とかでも。要相談。

↓

サオリ

最後に、紙に書いたエクササイズ（5枚）をユニ宛に郵便で送る。

エクササイズ 1 Fev.

サオリさんの エクササイズから
サオリさんへ

1. 動詞を ひとつ 思い浮かべる。

2. 空間に、その動詞を 書く。
   手は 使わない。

3. 異なった リズムで 動作を 試し、
   ベストな 書き方を 見つける。

4. その動作を 行いながら、
   動詞が もともと 持つ 内容を 実行する。

5. 頭で 空間に 大きく ゆっくり
   「わらう」と 書きながら わらう。

ユニより

エクササイズ2

1. 頭の中で水を想像する
2. その水がたてる擬音をひとつ選ぶ
3. コップ一杯の水を飲む
4. コップから胃の中へ移動した水が
   2で選んだ擬音をたてるように動く
5. 動くのをやめる
6. 胃の中にある水の揺れがおさまるのを待つ
7. 水が完全に静かになるのを
   ^(画) 想像できたら終了

2021.2.2 サオリ

エクササイズ 3 Fev.

2 Fev のエクササイズの 水から
散歩をする人へ.

1. 散歩に出かける。

2. 道ですれ違う、人間以外の
ものの動きを記憶し、
自分の身体でまねをする。

3. 帰ったら、すれ違ったものの
リストを紙に書く。

4. 書かれたことばから、もう一度
動きを再現する。

ユニより.

エクササイズ4

1. 今日の日付と
   月末までの日数を確認する
   例：2/5 → 23日

2. 指折り数えて待つ気持ちを
   想像しながら その日数分
   身体の好きな箇所を ゆっくりと
   1つずつ 折っていく.

3. 1回折った箇所を戻すのも カウントOK

4. 最終後の日を折ったら
   ひと呼吸おいて 折りを戻す

2021.2.5 サオリ

エクササイズ5.

できれば2人で行う。
もし1人の場合は、録音機(スマホ等)
を用意する。

1. Aは、動作を命令するフレーズをいくつか
書きとめる。10分間など時間を区切ると良い。

2. Aは、フレーズをひとつ、Bに伝える。

3. Bは、そのフレーズに反逆する。
ただし、否定形は使わない。
Ex.「指を撫でる」に対し、ただ撫でない
という応答(つまり静止)はしない。
「ひじを叩く」など新しい動作で応じる。

4. Bの動作が終わったら、Aはすぐに次の
フレーズを伝える。 2-4をくり返す。

1人の場合:

書きとめたフレーズを読み、録音する。
フレーズとフレーズの間は10秒~20秒くらい。
録音を再生し、上記3を行う。

エクササイズ6

1. 振動やふるえの擬音をひとつ選ぶ

例　ぶるぶる

2. A4の紙にその音をつくっている
2文字を大きく書き出す

例　ぶる

3. 擬音をなるべく速いスピードで
継続的に発話する → スピードを落としていく

例　
ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる ぶる ぶる ぶる ぶーる
ぶーる ぶ——る ぶ———る ぶ————る
ぶ—————る
ぶ——————る

4. 同じ音の流れを
身体全体または一部で体現する

=「ふるえ」から「ゆれ」へ移行する

2021.2.11 サオリ

エクササイズ 7

1. 自分が生まれる前のダンス作品を
ひとつ選ぶ。
YouTube 等で動画を探す。
(あまり長くないもの。Mary Wigman,
Isadora Duncan の作品や
Yvonne Rainer の Trio A,
ベジャールの ボレロ など)

2. 映像を 真似して 踊る。

3. 真似する自分の動作に ～ を
見つける。

4. 場所を 変えて ～ を試す。
家→屋外、都市→自然 など。

5. ～ の読み方を 決める。
なるべく 小さい 文字で 紙に書く。

～ ← このくらいか
もっと小さく。

12 Feb. yuni

エクササイズ8

1. 仰向けまたはうつ状せに寝て
   身体の力を抜く

2. 目を閉じる

3. 左右の手の指から1本
   左右の足の指から1本
   それぞれ選び、その先端に意識を向ける

4. 目を閉じたまま
   意識を向けた2箇所の距離が
   なるべく遠くになるように身体の形を変える
   (他の箇所はどんな状態になってもよい)

5. この時の腹の筋肉の状態に ～ を見つける

6. 目を開ける

7. ～ を保ったまま、2箇所への意識を戻し
   その2点をゆっくり接触させる

2021.2.13 サオリ

エクササイズ 9

(今のところ実現は難しいかも…?)

2～20人程度で行う。
それぞれ本を1冊用意する。

1. 同じ空間で、本を声に出して読む。
2. 他者に耳をすませながら、
   自分も朗読する。
3. 他者の朗読の方法に自分のそれを
   同期する。
4. 共通の ～ が生まれたと
   思ったら、朗読をやめる。

   ― 沈黙 ―

5. 朗読の方法を変え 1-4 を
   くり返す。(早口→ゆっくり、
   ささやき声→大声 など)

15. Feb Yuri

エクササイズ10（屋内・屋外 どちらでもOK）

1、周りを見渡して発見したものを
以下の4つに分ける

① 視える、触れる … ペン・コップ・机
落ち葉、電柱、自分の持ちもの etc
② 視える、触れない … 天井、ロフト、ガラスの中身
信号、遠くのランドマーク etc
③ 視えない、触れる … 空気 etc
④ 視えない、触れない … ①〜③以外のすべて

2、自分の身体へ意識を向けて
1と同じ振り分けをする

例
① 皮フ、肉、ツメ etc
② 血管 etc
③ 指中、顔（の皮フ？）、耳の後ろ etc
④ ①〜③以外のすべて

3、4つに振り分けられた身体の部位を
ひとつずつ順番に動かしてみる

～ ×4 を発見する

2021.2.18 サオリ